ソーム・ジェニンズの『舞踏術』

海老澤　　豊

古代ローマの教訓詩の中には，ある特定の主題に関する「技法」を読者に伝授するという作品があり，ホラティウス（Quintus Horatius Flaccus, 65-8 BC）の「詩論」（“Ars Poetica”）と，オウィディウス（Publius Ovidius Naso, 43-18 BC）の『愛の技法』（*Ars Amatoria*）が代表格である。(1) 前者はピソー父子に宛てた書簡詩という体裁を取りながら，詩作および作劇法について述べた教訓的な作品だが，時に羽目を外して大げさな表現に走り，へぼ詩人に痛烈な諷刺を浴びせかけることもある。後者は恋の手練手管を歌うという主題そのものが，生真面目な教訓詩に対する揶揄を感じさせる。これらの作品は作詩や恋愛に関する知識や技術を授ける教訓詩でありながら，諷刺やバーレスクの要素を盛り込んだ諷刺詩あるいは諧謔詩という二面性を持つ。

十八世紀前半の英国では両者をモデルにした模倣作が数多く書かれた。たとえばウィリアム・キング（William King, 1663-1712）の『料理の技法，ホラティウスの詩論をまねて』（*The Art of Cookery: In Imitation of Horace's Art of Poetry*, 1708），ジョン・ゲイ（John Gay, 1685-1732）の『トリヴィア，すなわちロンドン街路歩行術』（*Trivia; or, the Art of Walking the Streets of London*, 1716），ジェイムズ・ブランストン（James Bramston, 1694?-1744）の『政治術，ホラティウスの詩論をまねて』（*The Art of Politicks, In Imitation of Horace's Art of Poetry*, 1729）などである。このうちキングとブランストンの作品は，副題に明らかなように「詩論」を模倣したもので，内容や構成もさることながら，表現でもホラティウスの詩行をもじった箇所が少なくない。一方でゲイの作品は，三巻から構成されている点などはオウィディウスの影響が強いと思われ，諷刺よりもむしろ諧謔味が優っている。

本論はこのような「技法詩」のひとつとして，ソーム・ジェニンズ（Soame Jenyns, 1704-87）の『舞踏術』（*The Art of Dancing*, 1729）を読み解く。この作品は舞踏会にデビューする若い男女に舞踏の技術や社交術を伝授する教訓詩であると同時に，見かけ倒しの伊達男や虚栄に満ちたレディたちを諧謔味の強い文体で揶揄する諷刺詩でもある。その意味でジェニンズが直接的なモデルとしたのは，似たような態度で書かれたゲイの『トリヴィア』と考えられる。

なおスティールは『スペクテイター』第334号（1712年3月24日）で「舞踏は実のところ，もっともかけ離れていると思われる事柄においても，適切な立居振る舞いの助けとなると一般に理解されている」と述べた後に，舞踏教師ジョン・ウィーヴァーの手になると推測される手紙を紹介している。(2) ウィーヴァーと思われる人物は「現在舞踏が低調に陥っているのも，ペンが沈黙しているために他ならない。舞踏術は些細なお楽しみとしか見なされていない」現状を打破するために，舞踏の歴史についてささやかな論文を書くつもりだと記している。事実ウィーヴァーは同年9月に同著を公刊している。(3) ジェニンズがこれを参考にしたことはほぼ間違いない。

『舞踏術』は1729年に匿名で出版された時は全3巻851行で構成され，各巻の冒頭には梗概が付されていた。エピグラフには『アイネーイス』第1巻405行から「その歩み（ステップ）によって女神であることが明らかになった」という詩句が掲げられている。1744年の第2版でも特に違いは見られない。しかしドヅリーの『詩歌選』（1748）に収められた

版では全2巻561行に凝縮され，梗概はすっかり削られている。代わりに作者の名前がイニシャルで示され，エピグラフの前に「ファニー・フィールディング令夫人に献じる，1730年に書かれた」という文字が追加された。(4) 現在ではこの改訂版が一般に流布しているが，コティスは「この推敲は作品に技術的に大きな支配をもたらしたが，初版のとりとめのない文体や主題の多様性は保存する価値がある」と述べている。(5) 初版と改訂版の比較も興味深いが，本論では初版の持つ雑然さに焦点を当てて論じる。

(1)舞踏会でどんなドレスを着るか

『舞踏術』の第一巻は舞踏会に臨む際の服装などについて歌う。冒頭でジェニンズは叙事詩以来の伝統に則り，主題の提示から筆を起こす。

> 優雅な物腰で動いて，流れるように踊り，
> 注意しながら易々と，活発だが落ち着いて，
> 響き渡る調べが伝える指示を心に留めながら，
> 正しい足取りで各々の調べ良き音楽に従い，
> 精妙な技術で丸く円を描くように足を運び，
> 低く体を沈め，また軽やかに飛び跳ねる術を，
> 私は歌う。
>
> In the smooth *Dance* to move with graceful
> Mien,
> Easy, with Care, and sprightly, tho' serene;
> To mark th'Instructions echoing Strains convey,
> And with Just Steps each tuneful Note obey;
> With *Nicest Art* to tread the circling Round;
> Where use the lowly *Sink*, or nimble *Bound*,
> I sing. (1: 1-7)

ジェニンズは対比法を用いて理想とする舞踏を簡潔に示す。舞踏は優雅で流れるような動きを必要とするが，同時に音楽にきちんと耳を傾けながら「正しい足取り」と「精妙な技術」を身につけなければならない。二行目の「注意しながら易々と，活発だが落ち着いて」という表現は，ジョン・デナム(John Denham, 1615-69)が「クーパーの丘」(*Cooper's Hill*, 1642)でテムズ川を描写したカプレット「深いが澄んでおり，穏やかだが澱むことなく，激高せずに強大に，氾濫せずに満ち溢れている」(Though deep, yet clear, though gentle, yet not dull, / Strong without rage, without o'erflowing full, ll. 191-2)の影響を感じさせる。(6) デナムのカプレットは通例「不調和の調和」を表わしていると解されるが，ジェニンズもこれに従ったのであろう。

引用に続く部分で，ジェニンズは詩神の助力を願うとともに，この作品を献じる女性に対して「彼女の足元に慎ましい捧げ物を投じよ」(at her Feet the humble Tribute fling, 1: 10)，また彼女の目がこの詩を見てくれますようにと歌う。初版と第2版では女性の名前が2音節分だけ空白になっているが，48年版でその正体がファニー・フィールディングだと明かされた。彼女は第四代デンビー伯爵バジルの末娘として生まれ「当時最高の踊り手の一人で，さらに美貌と愛らしい物腰で著名であった」が，初版が出た1729年に第七代ウィンチルシー伯爵ダニエルと結婚し，34年に亡くなった。(7) 当初ジェニンズが彼女の名前を伏せた理由は，おそらく結婚したばかりの女性に作品を献じることが，はばかられたためであろう。ジェニンズ自身も26年に結婚した身であった。

ただし初版にもフィールディングの名前は3箇所で見出される。まずは宮廷で催される舞踏会を彩る，きらびやかな女性たちを描く場面で「愛らしいフィールディング」(lovely *Feilding*, 1: 158)と言及され，次に「扇」が発明された挿話に「今やフィールディングの目がすべての心に火をつける」(*Feilding*'s now, her Eyes all Hearts enflame, 1: 272)とあり，さらに「無数の者たちを魅了したのはそんな姿だ，フィールディングが誕生祝いの舞踏会で踊る時」('Tis such an Air that makes her Thousands fall / When *Feilding* dances at a Birth-night Ball, 2: 240-1)と歌われる。彼女が舞踏と美の化身としてジェニンズの心を捉えたこと

に疑う余地はない。

続いてジェニンズは神々に助力を嘆願しながら，古代の舞踏について概説する。詩人が最初に祈願を捧げるのは「クレタ島の木陰で神聖な舞踏」(The sacred Dance beneath the *Cretan* Shade, 1: 18)を探し求めた美の女神ヴィーナスであり，続いて天界の王者ジョーヴである。なぜなら「汝(＝ジョーヴ)のためにこの術(＝舞踏)を慎重なレアが始めた」(For Thee this Art from prudent *Rhea* 'rose, 1: 23)からである。ジョーヴ＝ゼウスはタイタン族の王クロノスとレアの間に生まれたが，地位を奪われることを恐れたクロノスは生まれた子供たちを次々と飲み込んでしまう。そのためにレアはゼウスをクレタ島に隠し，クレスと呼ばれる若者たちに武装して踊らせ，剣で盾を打ち鳴らして赤子の泣き声をかき消したといわれる。(8)

天界で生まれた舞踏はやがて人間界に伝えられると，神々への信仰と結びつき，祭事には音楽に合わせて司祭が祭壇で神秘的なステップを踏むようになる。その時代に舞踏を含む芸術は正当な称賛を受け，舞踏家も十分な報酬と名声を得ていた。舞踏は戦士の嗜みとされ，「完璧な英雄はみな，舞踏会を飾り，戦場で剣をきらめかせる術に等しく精通していた」(Each perfect Hero equally was skill'd / To grace the Ball, and glitter in the Field, 1: 57-8)のである。また舞踏は頭脳を明晰にして血液を浄める運動であり，ソクラテスも舞踏に深い関心を寄せ，老いても「賢明な哲学者はこの術をなおも追い求めて，筋肉を引き締め，凍りかけた血を温めた」(The wise Philosopher this Art pursu'd / To string his Nerves, and warm his freezing Blood, 1: 75-6)という。

さらにジェニンズはヘシオドスやホメロスの詩行でも舞踏は讃えられていたと説く。このように主題に関わる歴史をひもとくことは叙事詩以来の伝統だが，ジェニンズは舞踏が神々から人間に授けられた尊い芸術であり，戦士も哲学者も詩人もこぞって舞踏を重要視していたと述べて，ともすれば軽く見られがちな舞踏を主題にした詩を書くことの正当性を訴える。

かくして自己弁明を終えた詩人は，舞踏教師になり代わって，舞踏および舞踏会で必要とされる万事について，しかつめらしく指南していくことになる。最初の教訓は舞踏の際に身につけるべき服装についてである。

> 兵隊は羽飾りを靡かせ，緋色の軍服に身を包み，
> 血と殺戮に塗れた人生を送ることを示している。
> 一方で僧正のローン地の帯は，二重顎の下で，
> 内部に神性が宿っていることを平明に語る。
>
> The *Soldier*'s nodding Plumes, and Scarlet red,
> Shew that his Life in Blood and Slaughter's led:
> Whilst the Lawn Band, beneath a double Chin,
> As plainly speaks Divinity within: (1: 99-102)

兵士の残忍性や僧正の贅沢な暮らしぶりをやんわりと諷刺しながら，服装は職業に合致しているものだと前置きした後に，舞踏会では底が薄く踵の低い靴を選び，風通しのよい軽い緩やかな服を着るべきだと教示される。続いて個別の忠告に移るが，舞踏会は若い男性と妙齢の女性が知り合いになるための絶好の機会であり，ジェニンズの忠告は異性の視線を集めることに関わるものばかりである。ただし男性に対する指示と女性に対する指示では明らかに温度差がある。色男に対しては，清潔で白い手袋をはめよ，時計隠しには気つけ薬を忍ばせておけ，鬘からフケが落ちないようにせよ，靴のバックルに針を立てたままにするな，など相手の女性に不快感や迷惑を与えないことを念頭に置いた勧告がなされる。それに対して女性に対する注意は，懇切丁寧であるばかりか，ジェニンズ自身の願望が刷り込まれたものになっている。

> 今度は，若々しい美女たちよ，汝らに歌おう，
> 快い微笑を浮かべて私の有益な労作を見たまえ。
> 汝らのために蚕は見事に作り上げた織物を示し，
> 勢いよく回る糸車が蚕の小さな生命を奪い取る。
> 汝らのために光る宝石はまばゆい色で輝き，

天の弓を描き出す色合いと同様に美しい。
汝らのために海は真珠という宝を明け渡し，
大地は秘蔵していた金の鉱山を開け放つのだ。
自然はこのように贈り物を与えるが，汝自身が
その贈り物を技で配分しなければ無駄に終わる。

And now, ye youthful Fair, I sing to you;
With pleasing Smiles my useful Labours view;
For you the Silkworms fine-wrought Webs display,
And lab'ring spin their little Lives away:
For you bright Gems with radiant Colours glow,
Fair as the Dyes that paint the Heav'nly Bow:
For you the Sea resigns its pearly Store,
And Earth unlocks her Mines of treasur'd Oar;
In vain yet Nature thus her Gifts bestows,
Unless those Gifts your selves with Art dispose.
(1: 133-42)

この詩行はジョン・ゲイ(John Gay, 1685-1732)の『田園の狩り』(*Rural Sports*, 1713)の一節を模倣したものと考えられる。(9)

まるで華やかな婦人が，高値を気にしつつ，
陸地や，大海原や，大空の美装を借りて，
毛皮，真珠，羽，輝くものを見せびらかして，
我々の目を眩ませ，呑気な心を欺くかのごとし。

So the gay Lady, with Expensive Care,
Borrows the Pride of Land, of Sea, and Air;
Furs, Pearls, and Plumes, the painted Thing displays,
Dazles our Eyes, and easie Hearts betrays.
(ll. 187-90)

ゲイは魚を釣るための疑似餌作りに関する教訓にかこつけて，疑似餌＝女性，魚＝男性という騙す者と騙される者の対応関係を諷刺的に描く。しかしジェニンズの詩行にはそのような意図は薄く，むしろ女性たちの美しさに陶然としながらも，同時に自分の作品を称賛してもらいたいという願望がありありと感じられる。一方美女たちが陸海空から得られた「贈り物」で自らを飾り立てるのは，ひとえに男性の関心を引くためで，いかに他の女性よりも自分を引き立たせるかという観点によるものである。

続いてジェニンズは女性のドレスの選び方を具体的に指南する。頬が赤らんでいる女性は新緑のような緑色の服を着るべし，肌が薄茶色の女性は輝く黄色い服で地肌を目立たなくせよ，色の白い女性は深紅を絶対に避けて，悲しげな黒い服を身につけるべし。このようにジェニンズは女性の肌と生地の色彩を対比させてドレスを選ぶことを推奨する。自分の欠点を直接修正するよりも，間接的に服飾で補えというわけであるが，その基になっているのは「舞踏は真の美が試される試金石なのであって，自然の手が拒むような魅力を許容してはならぬ」(*Dancing*'s a Touchstone that true Beauty tries, / Nor suffers Charms that Nature's Hand denies. 1: 173-4)という考え方である。このためジェニンズは化粧の厚塗りを強く戒める。見事に塗りたくって男性の視線を集めたところで，踊っている間に頬は照り輝き，唇の珊瑚色は褪せ，首につけた白粉も剥げてしまうからだ。

同じ観点からジェニンズは当時流行していた女性のさまざまな装飾品を批判する。「巨大なスカートの張り骨」(the *Hoop*'s enormous size, 1: 192)は，相手の男性の向こう脛を傷つけるばかりか，女性自身も芯になっている鯨骨で腰を擦りむいてしまう。「波打つ垂れ飾り」(waving Lappets, 1: 198)や「ぶら下がる房飾りのついた襞飾り」(Ruffles edg'd with dangling Fringes, 1: 199)は舞踏の邪魔になるし，「薄物の装飾」(the Cobweb Ornaments, 1: 200)は男性の金ボタンが絡まって取れなくなり，まるで折り合いの悪い夫婦が別れられないごとしだ。靴下留めを床に落とすなかれ，伊達男が拾って勝ち誇ったように見せびらかし，落とした女性は赤面することになると諌めて，ガーター勲章の創生にまつわるエドワード三世の逸

話に言及する。

しかしジェニンズは女性が携帯する小さな扇については「すばらしき道具は，魔法の魅力によって，汝の胸を冷やす一方で男たちの胸を熱くする」(A wondrous Engine, that by Magick Charms / Cools your own Breasts, and ev'ry others warms, 1: 237-8) と述べ，「勝ち誇ったように振り，勝利に満ちて叩き，怒りからはためかせ，気まぐれに軽く叩く」(Its Shake triumphant, its victorious Clap, / Its angry Flutter, and its wanton Tap, 1: 251-2) と気分に合わせたさまざまな使い方を説く。

ゲイは『扇』(*The Fan*, 1714) で，ヴィーナスが神々に命じて作らせた扇を，ストレフォンがコリンナを口説き落とすための贈り物にするさまを描いた。またゲイは『トリヴィア，すなわちロンドン街路歩行術』(*Trivia, or the Art of Walking the Streets of London*, 1716) で「パタン」(ぬかるんだ道を歩くために靴底につける木製の台座) 誕生の神話を語っている。(10) 鍛冶の神ヴァルカンがパティという娘のために「パタン」を発明してやり，おかげで彼女を口説き落とすことに成功したというものだ。これらは「発明詩」(invention poem) と呼ばれることがある。(11)

これを受けてジェニンズは扇が発明されるに至った挿話を語り始める。かつてアルカディアにファニーという美しいニンフが住んでいた。彼女が火照る頬を冷やすために，西風にそよいでくれまいかと望むと，風の神アイオロスは扇を発明し，ファニーにちなんで「ファン」と命名したという。ただしファニーはアイオロスの嘆息も愛情も気にかけることはなかった。ジェニンズが『舞踏術』をファニー・フィールディングに献じたことはすでに述べた。「扇」の挿話も彼女に念頭において書かれたものと想像されるが，恋の成就という重要な要素が抜け落ちているために，「発明詩」としては中途半端に止まっていると言わざるをえない。

(2)ガリアは舞踏と衣装で他国に優る

第二巻はフランス伝来の舞踏が主題で，いよいよ華やかな舞踏会が始まる。男性がお辞儀をして手を差し出すと，美女は快く壁際から進み出て踊り出そうとする。だがジェニンズは意気盛んな若い男女を押し止め，「技術に我々の肉体は服従しなければならぬ，優雅に易々と動くことを望むならば」(To Art our Bodies must obedient prove, / If e'er we hope with graceful Ease to move: 2: 37-8) と技術を身につける必要性を説く。この表現はポープ (Alexander Pope, 1688-1744) の『批評論』(*An Essay on Criticism*, 1711) の一節「詩歌の真の流暢さは偶然ではなく技術に由来し，舞踏を習った者が最も易々と動けるごとし」(True Ease in Writing comes from Art, not Chance, / As those move easiest who have learn'd to dance, ll. 362-3) を踏まえている。(12)

ジェニンズは舞踏術を極めたフランスの舞踏の歴史を語り始める。フランス人が規則性に富んだ舞踏を創始し，確かな指針によって確かなステップを確立した結果，舞踏術は飛躍的に進歩を遂げ，世界にその名を轟かせることになった。

> 我々の上品な舞踏はすべてフランスのおかげだ，
> 活発なリガドゥーン，ゆっくりしたルーヴル，
> 長いこと踊る者のいないボレーとクーラン，
> 不滅のメヌエットに，甘美なブルターニュ。
>
> To her we all our *Noblest Dances* owe,
> The sprightly *Rigadoon*, and *Louvre* slow,
> The *Boree*, and *Courant*, unpractis'd long,
> Th'immortal *Minuet*, and the sweet *Britange*.
> (2: 81-4)

ドイツは機械と印刷術と銃，オランダは交通，スウェーデンは戦争，イギリスは航海術，イタリアは芸術に秀でているが，フランスは舞踏と衣装において他の国より抜きん出ており，異性を惹きつける恋愛術にも長けている。さらにフランスは

あらゆる芸術の成果を結集して壮麗な仮面舞踏会を生み出した。そこでは淑女然とした娘たちも内気さをかなぐり捨て，用心深い親の目を恐れることもなくなる。冷淡な娘たちもお上品な赤面を忘れて，素顔を隠す仮面が心の内をさらけ出す。

数え切れない衣装がさまよう目を楽しませ，
光り輝く金やきらめく宝石でまばゆいばかり。
とびきり美味しい砂糖菓子がうずたかく積まれ，
熟した果実が房をなして手を伸ばすように誘う。
神酒のような葡萄酒は泡立つ流れとなって溢れ，
シャンパーニュの高山が産み，ブルゴーニュの
野で甘美に育った葡萄酒が何であれ揃っている。
舞踏はすばらしい夜を歓びで飾り立て，
音楽は丸天井になった屋根に響き渡る。

Ten thousand Habits please the wand'ring Sight,
With blazing Gold, and glitt'ring Jewels bright:
In lofty piles *Ambrosial* Sweetmeats stand,
And ripen'd Fruits in clusters court the Hand;
Nectareous Wines in sparkling currents flow,
Whate'er *Champaign*'s aspiring Hills bestow,
Or on *Burgundia*'s Plains delicious grow.
Dancing the happy Night with Pleasure crowns,
And *Musick* thro' the vaulted Roofs resounds;
(2: 91-9)

かつての舞踏術は指針も規則も存在しなかったために，教師によって教え方もバラバラで，さまざまな錯誤や不確実性がつきまとっていた。しかし偉大な舞踏教師フォイエの登場によって状況は一変した。彼があらゆるステップを記譜した書物を著したことによって，舞踏術は世界中に広まったからだ。(13) やはり高名な舞踏教師「アイザックのリガドゥーンは，ラファエルの絵やウェルギリウスの歌と同様に永続するであろう」(And *Isaac's Rigadoon* shall last as long / As *Raphael*'s painting, or as *Virgil*'s song. 2: 128-9) と，ジェニンズは舞踏術が絵画や詩歌と同等の地位を獲得すると主張する。

第二部の後半で，ジェニンズはさまざまな比喩を用いながら，具体的に舞踏術を伝授していく。高遠なオードや厳かな悲劇を歌うには，自分の力量が及ばないと悟った詩人も，牧歌で成功を収めることができるかもしれない。同様に敏捷なリガドーンやゆっくりと厳かなルーヴルに不向きな舞踏家も，穏やかなメヌエットを選べばよく，それも無理ならカントリーダンスに限定すればよい。というのも「真の舞踏は，真の機知と同じで，長所にさえ合わせれば，自ずと最もよく表現される」(True Dancing, like true Wit, is best exprest / By Nature, only to Advantage drest: 2: 158-9) からだ。これもポープの『批評論』の一節「真の機知とは自然を装って引き立たせること，よく考えられはするが，巧みに表現されぬもの」(True Wit is Nature to Advantage drest, / What oft was Thought, but ne'er so well Exprest, ll. 297-8) の模倣である。(14)

続いてジェニンズは舞台やロープ上での離れ業に近い舞踏に触れる反面，洗練された舞踏術に向かない田舎の郷士は田園の狩りに専念し，伊達男も舞踏はせずに女性の脇に侍っておれと手厳しい。ジェニンズの説く舞踏術の極意は，何よりもまず拍子に正しく合わせることにある。そのためには，競走馬が緑の地面を踏みしめるように，曲に合わせて足で軽く床を鳴らすとよい。またステップに過ちがないだけでは不十分で，音楽とひとつになるように踊るべし。名づけえぬ優美さが個々の動きに宿らなければならないが，それは言葉で教示できるものではないので，フィールディングのような巧みな舞踏家の姿から見て取ることが肝要だ。このあたり教訓詩としては適切な教示に欠け，ジェニンズがはなはだ頼りない教師であることが判明する。

この作品におけるジェニンズの目的は，舞踏術を伝授することよりも，むしろ踊る女性の美しさを称えることにあるようだ。詩人は歌う。舞踏は最高の美女をいっそう美しく見せることができる芸術である。美女は優美な手足を動かさない時も目を楽しませるが，踊っている時にこそ彼女の美

しさは十全に輝くのだ。

彼女は旋回する時に，体のあちこちから，
ヤマアラシのごとく，突き刺さる矢を放つ。
無駄なことだ，ああ，愚かな見物人は
快いが危険な彼女の目を避けようとする。
パルティア人のように，彼女は美しい巻毛と
傾けた象牙のような首で，背後の者も傷つける。

Then, as she turns around, from ev'ry part,
Like Porcupines, she send a piercing Dart:
In vain, alas! the fond Spectator trys
To shun the pleasing Dangers of her Eyes,
For, Parthian like, she wounds as sure behind
With lovely Curls, and iv'ry Neck reclin'd;
(2: 262-7)

「パルティア人」は逃走する際に後ろ向きに馬にまたがって，追ってくる敵に矢を射かけるという。美女を「ヤマアラシ」に喩えるのもいかがなものかと思うが，ジェニンズはその矢に刺されたい口なのであろう。最後に詩人はエピグラフに掲げた『アイネーイス』の一挿話に触れる。身じろぎもせずに立っている美女を見て，アイネーイスは森のニンフかと思うが，「動き出した途端に，その天上的な物腰と優美な足取りで，輝く美の女王であると自然に分かった」（But when she mov'd, at once her heav'nly Mien / And graceful Step confess bright Beauty's Queen, 2: 278-9）という件である。これは美女が踊るといっそう美しいという主張の繰り返しにすぎない。

（3）舞踏の相手は理性で選べ

ジェニンズは第三巻を英国に伝わるカントリーダンスの起源で始める。アーサー王が英国を統べていた頃，月光の降り注ぐ夏の夜に，美しく開けた林の空地で，妖精たちが活発な舞踏を楽しんでいた。羊飼いや農夫がこれを盗み見たことから，英国中で徹夜祭や五月祭の折にカントリーダンスが催されることになった。

手前で新しいダブレットを着たバンキネットが，
青いリボンがきれいな，赤ら顔のメアリアンと，
奥で清潔なピンナーで飾ったブラウジリンダが，
優しいコリンと，平らな緑地を踏み鳴らす。

Here *Bumkinet*, array'd in Doublet new,
With ruddy *Marian*, fine with Ribbons blue;
There *Blousilinda*, deck'd in Pinners clean,
With gentle *Colin* treads the level Green:
(3: 25-8)

「バンキネット」と「ブラウジリンダ」は，ゲイの『羊飼いの一週間』（*The Shepherd's Week*, 1713）の「金曜日」に，「メアリアン」は「火曜日」に登場する羊飼いで，「コリン」も『羊飼いの暦』（*The Shepheard's Calendar*, 1579）に登場するスペンサー（Edmund Spenser, 1552-99）の牧歌的ペルソナである。(15) 彼らは新緑をたたえる野原でメイポールを囲むようにして踊るのだ。やがて時代を経るに従って，カントリーダンスは種々の改良を加えられ，田園から宮殿にその場を移すことになった。貴賓の者たちがきらびやかな衣装に身を包み，フィドルやトランペットの響きわたるなかで舞踏会が催され，機械仕掛けを備えた劇場が建設される。

ジェニンズは若者たちに向かって，好みは人によって異なるが，一緒に踊る相手を選ぶ際には，外見ではなく理性を働かせよと教示を与える。間違った相手を選んだ男の末路は悲惨で，貧しく，愚かで，経験もない妻に，人生という退屈な舞踏を先導されることになるからだ。

舞踏においては，結婚の絆においてと同様に，
美しさよりもむしろ長所を基準に選ぶべし。
完璧な技術を備え，いつ動けばよいか，
いつ静止すればよいかを知る女性を選べ。

And in the Dance, as in the Marriage Noose,
Rather for Merit than for Beauty chose:
Be her your Choice who knows with perfect Skill
When she shou'd move, and when she shou'd be still; (3: 67-70)

蛇足ながら，ジェニンズは結婚について悪い印象しか持っておらず,「結婚という状態で枷をはめられて」(fetter'd in the Martrimonial State, 3: 74)とか，度を越した口づけは令嬢の栄誉を汚し，評判を取り戻すには「結婚,すなわち死あるのみ」(Marriage, or Death alone, 3: 108)とか，舞踏会は歓楽のために企画されるが,「結婚や流血沙汰という悲しい不幸」(sad Mishap in Marriage, or in Blood, 3: 114)で終わることがあまりにも多いなどとこぼす。

舞踏会で若者たちの挙動を見張る老人たちも問題だ。彼らは辛辣な批評家であり，自分が舞踏という快楽を楽しめないことを苦々しく思っている。思慮深い母親は娘におしとやかにするようにとやかましいが，そんな説教のおかげで娘は「生まれつきの無垢を，女性特有の手管と高慢で隠そうとする」(And strive their native Innocence to hide / With all their Sex's Artifice and Pride, 3: 103-4)ようになってしまう。

ここでジェニンズは母と娘の関係についてサロメの伝説を持ち出す。ヘロデ王は宮廷で踊るサロメの姿に釘づけになり，何でも褒美を取らせると約束したが，それを聞いた王妃エロディアは，洗礼者ヨハネの首を所望するようにと娘に命じた。ジェニンズは「おお，残酷な母，あまりにも従順な美女よ」(Oh, cruel Mother! too obedient Fair!, 3: 145)と慨嘆する。これはゲイが『トリヴィア』において，狭い道で出くわした二人のうち，どちらが道を譲るべきかを指南する喩えとして，オイディプスの父殺しを歌った「不幸な父，だが更に不幸な息子！」(Unhappy sire, but more unhappy son! 3: 218)を踏まえた表現であろう。(16) ジェニンズは代わりに,娘に母親の忠告に耳を貸さず，指輪やネックレス，金ぴかの四輪馬車や衣装一式，あるいは「着飾ったサル，すなわち夫」(a fine *Monkey*, or a *Husband*, 3: 152)をねだれと説く。

しかし舞踏会もたけなわとなれば，若い男女がすばやいステップで円を描いたり，目にも止まらぬ速さで跳んだりする。するとジェニンズは「詩人の訓示はここに至って無用の長物となり」(The Muse's Precepts here wou'd useless be, 3: 175)と，またしても教師役を降りて，見物役に徹しながら，舞踏に有益な倫理を見出そうとする。円舞で美女の相手が次々と変わることに触れて「不実な美女の何とも誠の寓意か」(How true an Emblem of th'inconstant Fair! 3: 194)とつぶやく。また舞踏ほど「輝く規則的な混乱となってさまよう」(a bright regular Confusion, 3: 200) 宇宙の枠組について，正確な雛形を示せるものがあろうかと断言する。さらに舞踏で織りなされる軌跡を人生に喩えて「小さく些細な行路を走り切ると，疲弊して始めたところに腰を下ろす」(our little trifling Race is run, / Quite tir'd, sit down just where we first begun, 3: 209-10)と語るといった具合だ。

だがジェニンズはすぐさま，お節介な指南役に戻る。女性の魅力に惹かれすぎて，舞踏がおろそかになってはならず，美しい音楽が流れている間に，くだらない戯言を囁いてもいけない。ただし休息の時間になれば，話は別である。

優しい囁きも，快いロづけもよし。
各々の秘かな望みも，愛の希望の告白もよし，
彼女の喘ぐ乳房を手で押さえてやるがいい。
美女は微笑んで汝の熱い想いを聞くであろう，
音楽が心を和らげ，舞踏が心の炎を燃やす。

The tender Whisper, and the balmy Kiss;
Each secret Wish, each softer Hope confess,
And with your Hand her panting Bubbies press;
With Smiles the Fair shall hear your warm Desires,
While *Musick* softens, and while *Dancing* fires.
(3: 221-5)

これは舞踏術の指南というよりも，恋愛術の手ほどきといったほうが，ふさわしい教示である。夜が明け始めて舞踏会も終了となれば，朝の厳しい寒さから女性を守るために，暖かいフードで彼女の愛らしい顔を包み，首をハンカチーフでくるみ，腕を肩に回してほっそりした腰を守り，熱いロづけで冷たさを忘れさせよ。熱い生姜を入れた白葡萄酒で，体の内部から暖めてやることも大切だが，冷たいビールは致命的な熱病にかかったり，鼻に吹き出物ができたりするので厳禁だ。

ここに至ってジェニンズは「詩人は親切な教育者としての役割を果たした」(The Muse has play'd the kind *Instructor*'s Part, 3: 253) と述べ，弟子たちに進むべき最も確実な道を示したと自画自賛する。彼は自分の労作(この作品)が死と時の力にも抗しうると豪語し，「美女たちは詩の一節を書き記した扇を持ち，輝かしい伊達男たちがそれを読む，読めればだが」(Each *Belle* shall wear them wrote upon her Fan, / And each bright *Beau* shall read'em — if he can, 3: 271-2) と全篇を締めくくる。

注

(1) *Horace: Satires and Epistles, Persius: Satires*, trans. Niall Rudd (London: Penguin, 1987), Ovid, *The Erotic Poems*, trans. Peter Green (London: Penguin, 1982)

(2) *The Spectator*, ed. Donald F. Bond, 5 vols (Oxford: Clarendon Press, 1965) 3: 236-7.

(3) John Weaver, *An Essay towards an History of Dancing* (London: Jacob Tonson, 1712)

(4) *The Art of Dancing: A Poem in Three Canto's* (London: W. P, 1729), *The Art of Dancing, A Poem in Three Canto's*, 2nd ed. (London: M. Cooper, 1744), *A Collection of Poems by Several Hands in Three Volumes* (London: R. Dodsley, 1748) 3: 173-95. なお *The Works of Soame Jenyns, Esq*, 4 vols (London: T. Cadell, 1790) 1:1では「1728年に書かれた」と訂正されている。

(5) Anne Cottis, ed. *The Art of Dancing: A Poem in Three Cantos by Soame Jenyns* (London, Dance Books, 1978)

(6) John Denham, "Cooper's Hill" in *The Poetical Works of John Denham*. ed. Theodore Howard Banks, 2nd ed. (1928; Connecticut: Archon, 1969)

(7) *The Works of Soame Jenyns, Esq*, 1: 3.

(8) ジェニンズはこの伝説の出典を「ルキアノスの対話」としか記していないが，正確には「舞踏」("The Dance") の一節である。*Lucian V*, trans. A. M. Harmon (Cambridge: Massachusetts: Harvard University Press, 1936) 221.

(9) John Gay, *Poetry and Prose*, eds. Vinton A. Dearing and Charles E. Beckwith, 2 vols (Oxford: Clarendon Press, 1974) 1: 48

(10) Gay, *Poetry and Prose*. 1: 58-79, 141-3.

(11) Ulrich Broich, *The Eighteenth-Century Mock-Heroic Poem* (Cambridge: Cambridge University Press, 1990) 83-6.

(12) Alexander Pope, *Pastoral Poetry and An Essay on Criticism*, eds. E. Audra & Aubrey Williams (London: Methuen, 1961) 280-1.

(13) Raoul Auger Feuillet, *Orchesography, or the Art of Dancing*, trans. John Weaver (London: H. Meere, 1706)

(14) Pope, *Pastoral Poetry and An Essay on Criticism*, 272-3. これは Bonamy Dobree, *English Literature in the Early Eighteenth Century* (Oxford: Clarendon Press, 1959) 521. が指摘し，Ronald Rompkey, *Soame Jenyns* (Boston: Twayne Publishers, 1984) 81. も追随している。

(15) Gay, *Poetry and Prose*, 1: 90-126., Edmund Spenser, *The Shorter Poems*, ed. Richard A. McCabe (Harmondsworth: Penguin, 1999) 23-156.

(16) Gay, *Poetry and Prose*, 1: 166